

仙川の家の中で安子夫人と 昭和30年ころ



「無車詩集」 昭和16年 甲島書

三 「自然の意志」と人間

人間の本能も、自然の意志によって与えられています。しかし、本能のままに身勝手な行動をとれば、自分を恥じ悔いる心がわいて来るのも素直な人間の感情で、それも自然の意志が与えた自然な働きです。

私たちは、自分を大切にし、人からも大切にされたいと思っています。しかし、本当に大切にしなければならぬ「自分」というのは、軽薄な欲望にとらわれて、わがままになつて「自分」ではありません。

本気になつて見つければ、必ず誰でも持っている自分の「個性」を大切に生かす人。美しいものを素直に美しいと感じて喜び、愛するものための骨折りを、苦勞と思わぬ人。そういう「自分」こそ、大切にされる値打ちがあるので。

また、他人を大切に思わず、自分だけ大切にすゝるなんて出来ない事にも気づかなくてはなりません。

そういう人の心の中に「自然の意志」は生きています。

四 世界中調和して生きる

生命と神の如き自然

あらゆるものよ生きよ、生きよ

何処までも生きよ

戦つても生きよ、

死んでも生きよ

こう自然は命じている
生命の泉、

力の泉、
がむしゃらの自然は

●
だが神の如き自然はそうは云わない。
全体で生きろ、

世界中調和して生きる、

人間の愛をことごとく生かして生きる。

地球は人間お前に任せただ、

お前に与えたものを

最も賢く最も貴く生かして、

世界の隅々まで生かせるだけ、

生かして見よ。

平原も、山も、海も、川も、

砂漠も、

動物も、植物も、鉱物も、

熱も、光も、電気も、その他

ことごとく生かして

お前の思う通りに見る、

事実、そうなりつゝある。

人間共

お前の賢さと貴さとを

のこりなく生かして見よ。

其処に神があらわれる。

神！

最後に神への凱旋。

人間の勝利

人間万歳！

その道を歩こう

自分達兄弟姉妹。

もっと知りたい 武者小路実篤

実篤と『自然の意志』

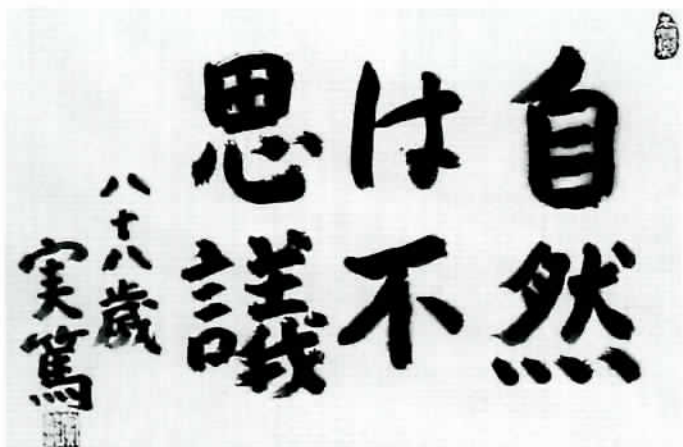
武者小路実篤は、若いころから、人間の生き方や社会のあり方について、真剣に悩み考え抜きました。その様子を見て親友の志賀直哉が、日記に「実篤は、心を病んでしまうのではないかと心配だ。」といった意味のことを書く程でした（明治44年4月3日、当時、直哉28歳、実篤25歳）。実篤の『自然の意志』についての考えも、そうした長い思索の中から生み出されたものでした。

一 自然の意志

人間も含めて、この地球、宇宙は、目に見えない不思議な力によって作られている。その力は、奥深い意志を持った自然の力とも言うべきものだろう。（“神”と言ひ、“造物主”と言うことも出来る。）

その“自然の意志”が発する声によく耳を傾け、それに従うことこそ、とりもなおさず、人間が人間らしく生きる道だ。

実篤は、このように考えたのです。



「自然は不思議」 昭和4年

二 『友情』主人公の生き方

実篤が大正八年に発表した小説『友情』は、近代日本の青春文学の代表的名作と呼ばれています。

『友情』の主人公で文学の道を志す野島は、友人の妹で美しく清純な杉子に、深い愛情を抱きます。野島には、大宮という真に信じあえる友達がいて、大宮は、野島と杉子の恋愛を祝福し、なにかと助力を惜しまないのです。

ところが、皮肉にも、逆らうことの出来ない自然な感情

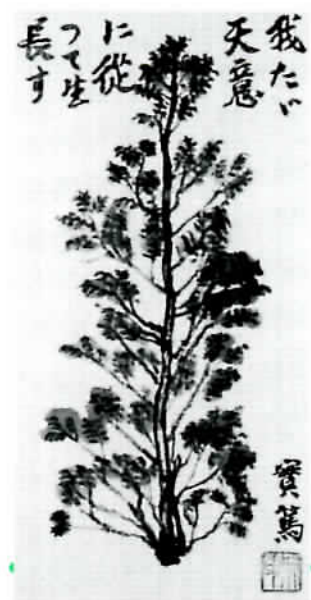
によって、杉子の心はいつしか大宮に傾き、大宮もまた、野島を裏切る結果となることを恐れ苦しみつつ、杉子と結ばれる道を歩むのでした。

全霊をもって愛した人を、堅く信ずる友に奪われる結果となった野島は、憤り、かつ悲歎にくれます。

しかし、野島は打撃に屈せず、立ち上がるうとし、大宮に送る手紙に、次のような内容を書き記すのでした。

△この打撃は僕にとつてよかった。：君とは仕事の上で戦おう。：僕は淋しいが同情してくれるな。一人で耐える。：いつか、山の上で君たちと握手する時があるかも知れない。：傷ついても僕は僕だ。いつかは更に力強く起き上がるだろう。これが神から与えられた杯ならばともかく自分はそれをのみほさなければならぬ。（：は一部省略）

野島は、自然の意志に従うことによって、より大きな人間に成長しようとしています。



樹木園 昭和10～15年